

微笑<sup>ほほえ</sup>む似<sup>え</sup>非<sup>せ</sup>紳士<sup>しんし</sup>と純情<sup>じゆんじよう</sup>娘<sup>むすめ</sup>  
2

## 目次

第一章	波乱の新生活、開幕	5
第二章	恋の一大イベント、発動	47
第三章	青の奇跡、誕生	157
第四章	暴風雨、直撃	227

## 第一章 波乱の新生活、開幕

### 〈勤務先〉

従兄いとこが経営する探偵事務所兼、何でも屋の“オフィスTK”で働き始めて早三年半。浮気調査や企業潜入などの仕事を地道にこなしてきた私、一ノ瀬麗いちのせりらは、突如波乱に襲われた。

きっかけは、去年の年末のこと。

駅で倒れた私は、とある人物に介抱された。

そしてその人物の部屋で驚愕の目覚めを経験して以来、どうやら私は、まるで運命のいたずらに巻きこまれまくっているようなのだ……

春にはまだ早い、一月の終わり。

駅で倒れた私を介抱してくれた人物——東条白夜とうじょうひやくさんとの衝撃的な出会いから、まだ一ヶ月ほどしかたっていないある日のこと。室長であり従兄でもある鷹臣たかおみ君は、私にとんでもない命令を寄

越した。

——二月から東条セキユリティの社員になれ。

それって……

「何それ！ 私クビってこと!？」

思わず立ち上がり、ソファに座る鷹臣君に詰め寄った。

ひどいよ、鷹臣君！ 傍若無人でいろいろ無茶振りばつかするけど、一応優しいところもあって、私のことある意味可愛がってくれているんだと信じていたのに！ そもそも鷹臣君が自分のところで働くと誘ったくせに、突然クビだなんて……！

憤りと混乱で目をつり上げた私に、鷹臣君は冷静な声を浴びせた。

「誰がクビにするって言った。お前が嫌だって言わねー限り、俺はお前を手放すつもりはねーよ」  
鷹臣君の静かな視線に、まっすぐに射抜かれる。その思いがけない発言に、不覚にも少しときめいてしまった。なんだ、やっぱり鷹臣君は私のこと必要だと思ってくれてたんだ……

従妹として、部下として、大事に思われていたんだと思うと胸の奥がむず痒くなる。少し感動に浸っていたのに——

「ようやく一人前になりかけてんのに。やつと使えるようになった駒を、俺が他所にやるわけねーじゃん。また一から教えるのめんどくせーし」

……今の言葉で全て台無しだ。

「返せ！ 少しでもときめいた私の心を返せー!!」

両手で鷹臣君のワイシャツの襟をつかみ上げる。このまま首絞めてもいいよね？ 私悪くないよね？

「いいから少し落ち着け。ほら、膝貸してやるからよ」

ぽんぽん、と右手で自分の膝を叩く鷹臣君。

「いえ、あの、それは結構です」

そうはつきり断つたのに、何故か鷹臣君の膝の上に横向きで座らされた。これはむかし、鷹臣君がよく使っていた方法だ。駄々をこねた私を宥めるために。

——って、鷹臣君、私を幾つだと思ってるの？ 鷹臣君が私をどういう目で見ているのか、少しだけわかった気がした。

まあ、別に誰かに見られても、「また麗が室長にいなされてるんだな」くらいにしか思われな  
いだろうし。そこまで気にしなくてもいいか。

「んで？ 何が聞きたいんだ」

私は鷹臣君の顔を、不満をたっぷりこめた目で見つめる。何がって、そんなの全部だよ！

「説明して。何で私が東条さんのところで働かなきゃいけないのか」

目つきの鋭い鷹臣君は、私をチラリと見てから口を開いた。

「大したことじゃねーけどな、東条白夜氏から相談を受けたんだよ。猫の手も借りたいほど忙しいと部下がぼやいてる、って」

部下？ と言うと、東条さんの秘書の、司馬さんだろうか。秘書の仕事って大変そうだなもんね。

「……で？」

「だから、『猫の手は貸せないが、麗の手なら空いてますよ』ってな」

「……は？」

鷹臣君は澄ました顔で、さらりと聞き逃せない発言をかました。

「って、ちょっとおおお!? 何余計なこと言ってくれちゃってんのー!?」

「何それ!? 嫌だよ! 何で私なの!? 他の人でもいいじゃない!!」

憤る私の顔を一瞥し、それから鷹臣君は、呆れたようなため息をついた。

「ならお前、一色や黒崎が抱えている案件、代わりにできるか? 一色は今、脅迫状を送りつけられた資産家の家に犯人捜しで泊まりこみだよな? 黒崎は大企業の後継者争いの渦中（かちゅう）にいる候補者の護衛だっけか。それから……」

あっさりとして、でも次々と告げられる仲間の仕事内容に驚く。何だかみなさん、危険で物騒な事件にかかわっていらつしやるようだ。それに比べたら浮気調査や企業の潜入調査なんて、気楽な仕事と言えるだろう。

私は素直に頭を下げた。

「無理です……ごめんなさい」

とりあえず謝つとけ。

「でも、せめて私に相談ぐらいあってもいいと思う。だって、急すぎるでしょ!」

「仕方ねーだろ。こつちにもいろいろ都合があるんだよ。まあ、ともかく契約社員として入れ。期

間はとりあえず三ヶ月だ。週二〜三日つてことだから、いいだろう?」

週二〜三日か。なるほど、それなら……

つて考えたところで、思い直して首を振る。待て待て、早まるな麗。私は自分、あの会社には行きたくないんだよ。鷹臣君の膝から立ち上がり、きっぱりと告げた。

「やっぱ嫌だ。断つてよ、それ」

これだけ明確に引き受けないと告げたのに――

「無理。もう小切手もらったからな。前払いで、三ヶ月分の給料の半分を」

びらり、と鷹臣君が胸ポケットから紙切れを取り出して私に見せてきた。そこに書かれているのは……

「何この金額!? 明らかに多いよ!」

見間違いないかと、思わず小切手を二度見した。

「ああ、さすがは東条グループの御曹司だ。太っ腹だよなー」

くそ、金の亡者め!

鷹臣君は小切手をひらひらさせながら周りにいるメンバーに向かって言う。

「よかったなー、お前ら。今年のボーナスは去年より上がるぞー。麗に礼言っておけー」

その発言を聞いてみんなが一気に盛り上がった。

「えー! 本当ですかあ? やったあ! 麗さん、ありがとうございますーす」

「やるじゃない、麗。この調子で頑張らなさいよ?」

「麗ちゃん、期待しているからなー！ 俺のボーナスよろしく」

瑠璃ちゃん、鏡花さん、そして滅多に顔を見せない木崎さんまで！ うう、なんて卑怯なの、鷹臣君。周りから向けられるこの期待に満ちた眼差し。イヤだなんて言えないじゃないか！

曖昧に笑って、でも視線では鷹臣君を思いつきり睨みつける。その余裕の笑みがムカつくんだよ！  
「お前さ、東条白夜のこと嫌いなのか？」

鷹臣君が、ふと真顔になって聞いてきた。

あんまり私が嫌がるから気になったのだろうけど、私は別に東条さんが嫌いなわけではない。ああ、でもこの間、東条さんが出てくる恥ずかしい夢を見たんだ。夢とはいえ、東条さんとラブラブだった記憶がある今、会うのが気まずいってのはある。

「別に嫌いじゃないよ？ 優しいし穏やかだし、紳士的だし、天は二物も三物も与えずぎって感じだけど。でもね、無理。東条さんが無理なんじゃなくて、あの会社が無理なの！ あそこには当然行きたくないの！」

「はあ？」

「だってこの前、あの会社に行ったとき、東条さんが下まで降りてきて私を出迎えたら、ロビーがすごいことになったんだよ!? 周りの目をまるで気にしないで私の手を引いたりするから、女性社員の視線が怖かったのなんのつて！ あれは今頃いろいろ噂になってるよ。受付のお姉さんには顔だけじゃなく名前だってバレてるし。そんなところに本名を名乗って出社なんてできない。無理、絶！ 対！ に、ムッリッつ！」

怪訝な顔をしている鷹臣君に、私は本気で訴えた。

あのときの女性社員たちの視線はマジで怖かった。好奇、嫉妬、値踏みと呪いの眼差し。あんた一体社長の何なの？ と、目が語りまくっていた。またあんな視線にさらされるのは、どうか勘弁願いたい。

女の嫉妬はおそろしいんだから！ 全力で避けたいんだ!!

真剣な顔で苦々しく唸っている、鷹臣君はさらりと提案してくれた。

「別に偽名でもいいらしいぞ？ 名前や経歴はこちらで好きにしていってよ。素でやりにくいなら、今回も変装するか？」

そうだよ！ 変装！ 偽名！ でもって、この間とは違うヘアスタイルにして、化粧にして。印象を変えてしまえば、社長にエスコートされて立ち去った女性だとは気づかれずに仕事ができる！

ナイス、鷹臣君！

「うん、偽名と変装アリなら……」

「なら、名前は何にするんだ？ あまり馴染みのない名前じゃ、いざというときにバレるぞ」

確かに。それを言われると、悩む。

ええ……新しい名前か。一番使用頻度の高い「レイ」はもう使えない。となると、身近にいて親しみがある名前は……

眉間に皺を寄せて考えこんでいたら、隣から鷹臣君が「九月生まれだから、苗字は長月でいいな」と告げてきた。どうやら苗字は思いつきで決まったらしい。

「長月、長月……じゃあ下の名前は『ミヤコ』で」

「ああ、美夜子叔母さんと同じ名前だな。そこから取ったのか」

「うん、漢字で『都』にしようかな」と

私の母の名前はミヤコだ。聞き慣れている母親の名前なら、呼ばれたときに多分反応できるだろう。

「わかった。偽名の件は俺から東条氏に伝えておいてやるよ」

よかった……

ホッと肩で息をついたら、鷹臣君が思いついたように、嬉しい提案をしてくれた。

「仕方ねーな。必要な変装道具、三万円まで経費で落としてやる」

「え、いいの!? やった〜!!」

欲しいと思っていた伊達眼鏡や新しいウィッグが買えるじゃないか!

すっかり上機嫌になった私を後ろで見ていた瑠璃ちゃんが、

「麗さん、室長に転がされているのに気づかないって。ちよろすぎますね……」

と呟いた。

「そこがあの子の可愛いところよ」

と、どこか諦めに似た口調で答える鏡花さん。

そんなふたりの会話は、自分の世界に飛び立っていた私の耳に届くことはなかった。



二月一日金曜日。

規定の出社時間より四十分早く、私は東条セキュリティに到着した。冷たい朝の空気を吸って、呼吸を整える。見上げた先には、東条セキュリティの立派な自社ビル。今日からしばらくの間そこが私の職場になるのかと思うと、緊張と不安を感じずにはいられない。

この時間なら、まだそんなに人はいない。人気がない今のうちに、私はそそくさと指定された場所に向かった。

約束場所は、会社近くのカフェ。事前に打ち合わせしているところを、会社の人に見られないようにとの配慮からだ。言われた時間より大分前に到着したにもかかわらず、既に東条さんと司馬さんが私を待っていた。

「おはようございます。お待たせしてしまって申し訳ありません」

ふたりが座っている席に行き挨拶をすると、東条さんと司馬さんも立ち上がってくれた。

「おはようございます、麗さん」

「おはようございます、一ノ瀬様。早速ですが、こちらが社員証です」

司馬さんから渡されたのは、会社名と、私の新しい名前——『長月都』が書かれたカード。手触りがしっかりしているのは、中に情報を読み取るチップが入っているからだろう。これ一枚でタイ

ムカード代わりにもなるし、場合によっては通行許可証の役割も果たすんだとか。他にも便利な機能を組みこまれているみたいだけれど、それはまた後で詳しく教えてもらうことにした。

「麗さん、このお名前はどなたが決めたのですか？」

カードを見つめている私に、東条さんがたずねてきた。

「えっと、苗字は、室長の『九月生まれだから長月でいいだろう』という安直な発想から生まれて。そして都は、私の母の名前であるミヤコから取りました。美しい夜の子と書くので、字は違うんですけどね」

「美しい夜の子で美夜子さんおしやと仰るのですか……素敵な名前ですね」

「ありがとうございます」

自分の名前じゃないのに、何だか照れる。でも家族が褒められるのは単純に嬉しく感じた。

極力誰にも会わないように気をつけながら案内された場所は、既におなじみになりつつあるこの会社の社長室。

部署者の私が何度も社長室に通されるのも、よくよく考えてみればおかしい話だ。っていうか、私社長室しか来ることがない……。今日も応接室とか会議室を借りることもできただろうに、何故か当然のようにここ、社長室だし。

ここでこれから、細かい職務内容について説明を受けることになっている。

自分がどの部署で働くのか予想がつかず、私は改めて不安になってきた。だって業務内容はお

ろか、配属先さえ聞かされてないんだよ？ 鷹臣君にたずねても、「知らない」の一点張りだったし。ってか、聞いておいてよ、そのくらいは！

ちゃんとした会社勤めなんて、潜入調査で派遣社員として事務をやったくらい。こんな立派な会社で一体何ができるんだろうか。セキュリティに関する専門知識はおろか、パソコンにも詳しくない。正直言ってお役に立てるかどうか……

高級な革張りのソファに座って緊張している私に、東条さんが安心させるような微笑みを浮かべて話しかけてきた。

「麗さんには、司馬のサポートをして頂きます」

——え？

司馬さんのサポート？ つまりそれって……

「私の第二秘書ですね」

心の中で呟いた私の疑問を読み取ったように、東条さんはさらりと答えをくれた。

「え……ええーっ!？」

私は驚きのあまり立ち上がった。

二番目とはいえ、いきなり社長秘書!? 一体何を考えているんだこの人は！

いくらなんでも無理！ つか、無謀むぼすぎるとは思わないんですか!？」

「私、秘書検定の級とかもつてないし、それ以前に敬語がかなり危ないんですけど!？」

そうなんだ。海外育ちを言い訳にするつもりはないけど、でも実際のところ、私にはまともな言



葉遣いができる自信なんてない。特にお客様に対する電話の応対とか、非常にあやうい。それにそのつない振る舞いとかも……。変な敬語を使って直接恥をかくのは私だけど、結局は上司の東条さんの恥にもなってしまう。それはいくらなんでも申し訳ない。いきなり会社のトップの秘書なんて荷が重過ぎます、東条さん！

「大丈夫ですよ。司馬がきちんと指導致しますので」

一歩前に出た司馬さんが、「ご安心ください」と、軽く会釈して告げた。

「それに一ノ瀬様がここにいらしてくださるだけで、私の仕事が減りますから」

小さくぼそり、と呟いた言葉が謎だったけど。猫の手も借りたいとぼやいていたのは、きっと司馬さんなのだろう。そしたら大したことはできない私みたいなものでも、多少は役に立つということなのか？

何か納得いかなかったが、私は曖昧に頷くことしかできなかった。

「ところで、麗さん。その髪は……」

遠慮がちに東条さんが私の髪を見つめる。

実は、今の私は変装はしているが、ウィッグはかぶっていないのだ。

「はい、切っちゃいました。イメージチェンジです！」

肩下でそろえた髪の毛を触りながら、私はにっこりした。

行きつけの美容院で、最初は毛先だけそろえてトリートメントをしてもらうつもりだったんだけ

ど、雑誌の占いコーナーを見て、予定を変更してしまった。だって、乙女座はイメチェンで恋愛運UPって書いてあったんだよ？ 鷹臣君から七月までに彼氏をつくれと命令されている今、そんなのを見つけてしまったら、やらないわけにはいかないでしょう！

その場で覚悟を決めて、知り合いのオネエ口調の美容師さんに、『イメチェンします、私！』と意気込んで宣言。背中の中まであったストレートの髪の毛を、ばっさりと鎖骨辺りのミディアムまで切ってしまった。本当はもっと劇的に変化するため、さらにばっさりいこうかと思っただけど、美容師のお兄さんに『いきなりショートにしたら、あんた絶対に泣くわよ』と言われて、思いとどまったのだ。確かに、いきなりショートはハードルが高いかも……と考え直して、まだ結べる長さで諦めた。

髪の毛をここまで短くしたのは、高校生のとき以来。ウィッグを被るのは、これでかなり楽になったんだよね。

そして髪を切った理由は、実はもう一つある。

この前この会社に来たときは、地味目のパンツスーツに地毛を巻いた髪型だった。だから地毛を隠すために、これからずっとウィッグをつけて出社しなければならなかったと思っただけ、なんだからもう、すっごく面倒臭くなってる。それで逆に、地毛自体を変えてしまおうと思っただけ。くるくるの巻き毛がいきなり肩までのストレートに変わったら、同一人物と気づく人はそうそういないだろう。しかも一度しか見られていないんだし。

東条さんの隣に立って見劣りしない美女になるのは無理。でも、近くにいても無害って感じの地

味が目立たない女を演じることならできる。

なんだかイメチェンが変な方向に行ってる気もするけれど、ま、それは気にしない。

今はメイクも地味めで伊達眼鏡も着用中。パンツスーツでシャツはきつちりと第一ボタンまでとめて……という、色気はもちろん、女らしさのかけらもない姿で入社したので。

これで恋愛運UPはちよつと難しい気もするけど、平穩を勝ち取りたいなら女らしさは封印した方が絶対にいい。いらぬ争いを避けるためには、「私って空気です！」路線でいった方が絶対楽だと判断したのだ。

毛先を指でいじる私を見つめて、東条さんは形のいい口を開く。

「そうですか、切ってしまったのですか。長いのも大変よくお似合ひでしたが、短いスタイルもとっても可愛いですよ」

「ありがとうございます」

褒められて悪い気はしないけど、こんな風にすぐに女性を褒める人って、女性とのトラブルも多そうだ。大変だろうな〜なんて、いらぬことまでつい考えてしまった。

あ、もしかしてそういうトラブルの解決も秘書のお仕事です、なんて言わないよね？ 司馬さん。

「今月、乙女座はイメチェンで恋愛運UPらしいので、思いきって切ったんです。結構評判がいいんですよ」

びっくり、と微かに東条さんの優美な眉がっつり上がったけれど、それは些細な変化だったから、私はそのままスルーしてしまった。

社長室で仕事内容の説明を受けた後、すぐに秘書課に行って挨拶をした。

「長月都です。よろしくお願ひいたします」

きちんとお辞儀をして、冴えない無害女をアピールする。真面目そうな仮面を被ったポーカーフエイスで、お堅い女子を演じる。仕事以外に興味はございません、どうかご心配なさらず。

そんな、いつもの自分とは全然違う、無表情で女らしさの欠片もない地味女。それが、私が考えた「長月都」のイメージだ。

口調は敬語を使って、極力私語も慎む。敵をなるべく作らないように、それと麗がうっかり出ないように、プライベートに関する一切喋らない。

たまたま映画でそんな秘書を見たので、とりあえずその女優さんを真似てみたのだ。モデルがいるイメージが浮かびやすいから正直助かったよ。

役員秘書をしているお姉さま方は、これまた美人さん揃いだ。目の保養！ と内心でガッツポーズ。もし、「きれいな女性は好きですか？」と聞かれたら、声を大にして「大好きです！」と宣言する自信がある。

少しだけ言葉を交わしたけれど、皆さん美人な上に有能で、当然仕事もできるし、知識も能力も兼ね備えた方々だった。帰国子女の人もいるけど、そうじゃなくてもまず英語が喋れない人はいない。中国語が堪能な人や、ドイツ語、フランス語を話す人もいるとか。女性ばかりなのかと思ったら、司馬さんのほかに男性がいた。ちなみにその人は専務付きらしい。

秘書課のお姉さま方はじろじろと不躰ふしつけに見てくることはなかったけど、それでも優雅な微笑みの下に隠れている疑問を、私は嗅かぎ取ってしまった。「何故こんな冴えない女がいきなり社長の第二秘書に？」と。

完璧なボーカルフエイスだったけど、バれていますよ？

よほど有能なのだろうかと私を探ってくる視線が突き刺さる。まあ、確かに疑問に思うのもも尤もだから仕方ないけど、私に対するハードルを上げないでほしい。正直なところ、自分でも、どうして私なのかよくわからないんだよ！

……ストレス、溜まりそうだな。

ああ、ほんと東条さんの秘書なんて重大な役割を、何で私ができる羽目になったんだ！

自己紹介が終わった後に、司馬さんから東条さんのスケジュールを渡された。

「こちらが社長のスケジュールになります。スケジュール管理も大事な秘書の務めです。くれぐれもダブルブッキングなどしないように気をつけてください。長月さんには本日の予定表をお渡ししておきます」

びっしりと細かい字で書かれた予定表に、思わず立ちくらみがした。

な、なんだこれは……！ 分刻みっていうか、秒刻みなんじゃないの!?

何だか東条さんのスケジュールを見ているだけで全身に疲労が……いや、私、まだ何もしていないだけだよ。

司馬さんの仕事は、会議で必要な書類集めや事前の下調べから、出張時のホテルや飛行機、はたまた普段のお昼ごはんの手配まで。

ありえない、これをひとりでこなしていたのか……。司馬さんに思わず尊敬の眼差しを向けてしまった。

私、本当にお役に立てるのだろうか？

不安ばかりが募つっていく。

私は手の中のスケジュール表を凝視したまま、早くも小さなため息をついた。



一日が終わり、麗が退社した社長室で、白夜は数日振りに再会した彼女の、長月都としての姿を思い出していた。

「麗さんのあの格好は彼女らしくないので少々驚きでしたが……逆に好都合ですね」

そんなことを呟いて、くすりと小さな笑みを零した。

年末にこの部屋を訪れたときと同一人物とは、到底思えない豹変ひょうへんぶりだ。

あのときの、若い女性らしいワンピースを着ていた麗と、今日の地味でシャツのボタンをきっちりとめた麗とは、印象が違いすぎる。お堅く真面目なイメージを作り出している麗は、既に麗ではなく、長月都 という名の架空の人物なのだろう。

司馬は、動かしていた手を止めて白夜を訝しげに見つめた。

司馬の無言の問い掛けに、白夜は目元を和らげて口角を上げる。

「麗さんを狙う余計な虫が減ります。害虫駆除をしなくて済むなら、好都合でしょう？ 私だけが本来の彼女を知っていればいいのですから、今の長月さんは実に理想的ですね」

——麗を狙う男は、たとえ自社社員でも容赦しない。

顔を強張らせる司馬を視界の端で捉えた白夜は、彼にふわりと微笑みを向けた。

〈飛び交う噂〉

東条社長に新しい秘書がついた——

そんな噂が広まるのに時間はかからなかった。男性ならともかく、第二秘書はまだ二十代の女性。しかも契約社員なわけだから、周囲の関心が集まらないわけがない。

私が東条セキユリティに出勤し始めて三日目の、二月六日。

月、水、金の週三日だけが出社日となっていたので、私はこの数日で自分がほぼ全社員の注目的になっていたことに、全く気づいていなかった。

今日も地味なパンツスーツにシャツのボタンを全てきつちりととめて、髪を後ろで一つにくくる。分厚いレンズの黒縁伊達眼鏡をかけて、色味を抑えたメイクに、唇はリップクリームだけ。とにかく

く地味で目立たない容姿を作った。お堅い真面目なイメージは大切に、でも清潔感にはしつかりと気を配っている。そしてさらに真面目な女性を演出するため、始業時刻の二十分前には席につくようにした。

当たり前のことだけど、東条さんが移動すれば司馬さんがその後ろに控え、その司馬さんの後に私がついて行く。最上階ならともかく、十階なんて中途半端な場所に社長室と秘書課があるもんで、いろいろなところで他の部署の人たちに会うわけです。そこでは秘書課のお姉さま方の視線なんかにならないほど、じろじろ見られまくり。

この状況って、完全に動物園の珍獣扱いだよ！

秘書課のお姉さま方は、何か思うことがあっても、ポーカーフェイスできれいに隠す技術を身につけているけど、当然、社員全員がそんなテクを持っているわけではない。社内ですれ違う人たちは東条さんを見るとお辞儀をし、その後でちらりと私の様子を窺っていることはもうバレバレで、そんな視線がとにかく痛い……

瞬く間に広まった噂の女が、こんな地味で平凡な容姿だから、実物を見た社員は戸惑いを隠せないらしい。

曰く、あれが新しい秘書？ よつぽど優秀なのか？ 女らしくないから逆に選ばれたのか？ いやいや、実力主義の社長が選んだってことは相当頭が切れるのだろう、などなど。私のところにも、そんな類の雑音が聞こえてくるんだから、たまったもんじゃやない。

そして仕事はといえば。

覚える量がハンパない。いくら司馬さんのサポートと言っても、雑用を含めてこなす仕事が大量にありすぎるのだ。秘書って体力勝負なんだな、と思った。何となく優雅なイメージがあったけど、そんなの大間違いだ。常に神経をピリピリさせて周囲に気を配り、あらゆる事柄に臨機応変に対応しなくてはならない。そして、重大な情報を漏洩しないように口を閉ざしておく。だって会社の重役に仕えているわけだからね。もちろん私もパートとはいえ、雇用契約を交わしたときに、会社の情報を一切漏らさないとサインをしたし。

いずれにしても、想像以上にストレスが溜まるポジションだ。まだ三日目だっというのに、精神的にも体力的にも疲労感満載だ。

で、ただ今絶賛休憩中IN女子トイレ。

ってか、唯一寛げる場所が女子トイレの個室って、どんだけ孤独なの、私！

だって長月都を演じているから、素に戻る時間がほとんどないんだよ。社長室に東条さんと司馬さんしかいないときは、東条さんは私の気が休まるように「麗さん」って呼んでくれるけど。でも一步社長室を出たら即「長月都モード」に突入！無表情で真面目な地味女。淡々とした口調で常に敬語で喋る。でしゃばらず主張せず、三步下がって控えめな態度をキープ！……しなくてはいけない。

私は盛大にため息をついた。

「くったびれた……」

さつきまで会議に同席していた緊張感もあって、私は心底疲れきっていた。午後の休憩時間に便所の蓋に座ってグツタリする二十五歳の女……。なんだか切ないぞ。

休憩時間が残り十分になったところで、力を振り絞ってトイレの個室から出る。

仕事に戻る前に、自販機で何か元気が出る飲み物でも買ってこよう。

そう思って冷たい水で手を洗っていたら、聞きなれない複数の女性の声が近付いてきた。

そういえばここは社長室がある十階じゃなくて、四階だった。

十階の女子トイレならお会いするのは秘書課のお姉さま方ぐらいだけど、この階だと誰が来てもおかしくない。他の課の女性社員にかかわるのは、正直、ちよつと遠慮したいな……

そしてやはりというか、近付いてきた声の持ち主たちはそのままトイレに入ってきた。流行を意識した服装に少し華やかさを加えた、雑誌に出てきそうな若いOLスタイル。ここは制服がなく、派手すぎない格好なら基本的にスーツじゃなくてもOKだ。都は地味路線なので、あえて味気ないスーツを着ているけれど、他の部署の女性社員はスカートやワンピースとか可愛い服装をしている人が結構多い。入ってきた三人の女性もそんなタイプだった。

ナチュラルな巻き毛に、春の新しい色リップグロスを塗っていた。隙のない完璧メイクを施した三人は、それはそれは女子力の高そうな若いお嬢さん方だ——って、私もまだ若いはずなんだけど。彼女たちは私を見かけると、一瞬怪訝そうな表情を浮かべて顔を見合わせた。何でここにいるの？と思っっているんだろう。

うん、かわり合いになるのは面倒だな。

会釈だけしてさっさと去ろうと思ったのに——やっぱりそう簡単にはいかなかった。

「長月都さん、でしたっけ？ 社長の第二秘書の」

三人の中でもとりわけ派手な美人が、上から下まで舐めるようにじつくりと眺めてくる。その不躰な視線は秘書課のお姉さま方とは比べるまでもなく、思いつき侮蔑が入った視線なわけで。きつい性格が表れている。折角美人なのに自分で台無しにしているんだな、なんて、つい思ってしまう。

「はい、そうですか」

名前を言われたから答えたけど、自分は名乗らないで人の名前を確認するって、どうなの？ ともじやないけど、友好関係は望めそうにない。

「総務の松山よ。こちらが高橋と、山田。初めまして？ 長月さん」

ようやくそう名乗り笑顔を向けてきた松山さんと、両隣にいるよく似たメイクをしている高橋さんと山田さんに、とりあえず軽く会釈をする。ああ、山田さん、そのメイクよりもっとあなたに似合うメイクがあるのに……なんて、どうでもいいことを考えてしまった。って、結構余裕あるのか？ 私。

「前からあなたに聞きたいことがあったの。丁度いいタイミングだわ。単刀直入に聞くとね……あなた、どうやって社長に取り入ったのかしら？」

……わかっていたけど、やっぱり東条さんがらみだったか。

意外性がなさすぎてつまらない。

どうやって取り入ったのかなんて、聞いてどうするんだろう。美人な女性が秘書ならともかく、平凡で地味な容姿だから納得できないのかな？ こーゆーのが面倒だから、無害アピールを必死でやっているのに、空気読んでよ！ って正直言いたいんですけど。

「失礼ですが、質問の意図を計りかねます」

表情筋を動かさないように気をつけながら、抑揚をつけずに答える。

「意図も何もそのまんまよ。どうやって女性嫌いの社長の秘書の座に就いたのかって聞いているのよ。今まで女性を傍に置いたことがない方なのに、一体何故あなたは社長の下で働いているの？ 折角だから教えてもらえないかしら？」

松山さんと名乗った女性の言葉に思わず動きが止まる。

え、今なんて言った？

東条さんって、女性嫌いな……!? 嘘、初耳だよ、そんなの!!

「答える気がないのかしら？」

くすりと笑った松山さんをじつと見つめる。

果たして私はどうやって誤解を解けばいいのか？

えーと、女性嫌いの東条さんと同じように、男嫌いなんです！ とか言ってみるか？ いやいや、それじゃなんの解決にもなっていない。

だったらこの際、私が東条さんに興味がなくてきっぱり伝えられるのか？ いやいやいや、仮にも

雇い主に対して「興味ない」はひどいよね。今度は何様だよ！ って言われそうだし。

やっぱり方向性としては、男性に興味がない、とかか？ ……でも、それだと女性に興味があるのかと思われそうで、それもエライ誤解を生む。

自分が無害つてことをさりげなく伝えたいのに、じつと睨みつけてくる三人の迫力に押されて私も内心焦ってきた。

「ちよっと、いい加減に私たちを無視するのは……！」

背の高い高橋さんが私に一步詰め寄った。短気だな。

一体なんて言ったらこの場を無事に脱出できるんだろう。内心の焦りや戸惑いを見せない表情を保つのに必死になってしまう。見た目は真面目顔で、頭の中ではパニックだよ！ どう切り抜けられるの!?

焦った私が、結果口にした言葉は……

「ご心配には及びません。人間の男性に興味がありませんから」  
だった。

ぼかんとしている彼女たちに「失礼します」とひと言伝え、足早にトイレを出た。

よかった、セーフ！

ちよっと範囲が広すぎるかな、とは思う言葉だったけど、まあ、大丈夫だよ。これで私は無害女になれたはず！

そしてしばらくして、私は望んだ通りの結果を得たことに気がついた。

東条さんの近くにいても、女性社員の嫉妬の視線に悩まされることがほとんどなくなったのだ。

ただ、望んでいた結果が得られたのと同時に聞こえてきた「不思議ちゃん」という評価をどう受け止めたらいいのかは、ちよっとよくわからない。

まあ、でも。

これで平穩無事に暮らせるのなら、不思議ちゃんでも何でもいっか！

### 〈勘違い〉

いよいよバレンタインが翌週にせまった、今日この頃。

社内の女子社員はさぞかし恋のイベントに燃えているだろうと思っていたけれど、何だか思ったよりもテンションが上がっていない。ってゆーか、微妙に暗い。何故だ？

てっきりたくさんの人が東条さんにチョコを贈ろうと、ソワソワしていると思っていたのに。そんな私の疑問に、司馬さんがあっさりと答えをくれた。

「社長は誰からもバレンタインに贈り物を受け取らない主義なのです」

え、マジで？

段ボール箱一杯もらって、後で自宅に送るんじゃないのか。よくドラマや漫画で見る人気アイドルのように。女子社員から絶大な人気を誇る東条さんならその展開も大いにありえると思ったんだ

けど……まあ、余計な問題が起こらないで済むならもちろん大歓迎ですが。でもちよつとだけ、非現実的なシーンをみてみたかったかも。

少し残念に思っていたところで気づく。

もしかしたらそのことも、東条さんが女嫌いつて言われる理由なのかな？

彼にかつて恋人がいたことはちゃんと調べたから知っている。でもここ二年ほど、女性の噂はおろか、影すら見えないらしい。丁度社長に就任したこともあって、単に忙しかったのもあると思うけど。でも、もしかしたらその二年で女嫌いになる何かが起こったのかも？

……そういえば。

私の友達も昔は女の子とつき合っていたけれど、ある日を境に女の子とはつき合えなくなったって話を聞いたな。結局彼は両性愛者バイセクシュアルではなくて、同性愛者ゲイになってしまったんだよね。

ってことは？ もしかして東条さんも……？



お腹が空腹感を訴え始める。気が付けば時刻は十二時だ。

お昼休みはきつちりと休むことにしている。

東条さんと司馬さんと三人で社長室にいるときは、ふたりは私を麗として扱ってくれる。東条さんは相変わらず優しいし、お昼休みは息を抜けるいいリラックスタイムだった。

響ひびきお手製のお弁当を広げると東条さんが「今日はお弁当なんですわ」と話しかけてきた。東条さんのご厚意に甘えて、毎回高くていいランチをおごってもらうのはさすがに抵抗がある。それに東条さんと同じお昼を食べ続けていたら、あつという間にカロリーオーバーになりそうなので、最近お昼ご飯の注文は遠慮させてもらっているのだ。

「外食ばかりでは飽きるのよ、今日はお弁当を持って来たんです」

いつもおいしいそうなお弁当だからすつごく、すつごく残念だけど。でも今は一社員なんだし、私だけ特別扱いつてわけにはいかない。社員食堂を利用するときもあるけれど、今日は響が作ってくれたお弁当持参だ。ありがたいたくことにしよう。

二段になっているお弁当箱の一段目は、白いご飯にゆかりのふりかけと梅干。そして二段目にはおかず。ひじき入りの玉子焼きにインゲンの和え物、甘辛のつくねにかぼちゃの煮物。別の容器にレタスとトマトのサラダ。思いつきり家庭料理だけど、お弁当箱に入っていると、何故かいつもより美味しく感じられる。もちろん響が料理上手ってこともあるんだけど！

基本的に、うちの食事は響が作ってくれるんだよね。私よりも料理が上手って、ほんと響はいいお嫁さんに……違った、いいお婿さんになれると思う。よくできた弟を持って、お姉ちゃんは嬉しいよ。

「すごいですね。全部手作りなんですわ？」

目の前のソファに腰掛けた東条さんがたずねてきた。東条さんの前には高級料亭から届いたお弁当が置いてある。それに比べるとちよつと恥ずかしいけど、私は笑顔で頷いた。



「ええ、手作りです」

そこではっと気づく。そうだ、外食ばかりじゃ身体に悪いよね？ そりゃカロリーは取れるだろうけど、たまには家庭的なものも食べたくなるんじゃない？……

差し出がましいかとも思ったけれど、私は遠慮がちにたずねてみた。

「あの、東条さんはずっと外食ばかりで飽きませんか？」

少し困った顔で微笑んだ東条さんは、「そうですね、私も時間があるときは作るのですが、ついに頼ってしまいますね。おいしいとは思いますが、これが毎日となると、少し飽きてしまいます」と答えた。

やっぱり飽きるよね。

「よかつたら今度お弁当作ってきましようか？ お口に合うかはわかりませんが」

よほど意外だったのか、東条さんは若干驚いた顔をした。そして次の瞬間——満面の笑みを浮かべた。

「よろしいのですか？ それはとても嬉しいですが」

「はい、大丈夫ですよ！ 二人分も三人分も大して変わりませんから」

つて、確か響が言つてた。だから大丈夫なはず。

「そうですか？ では遠慮なく、是非よろしくお願いします」

「はい！ 任せてください」

早速響に、私の分＋東条さんのお弁当のリクエストをしておこう。

自分で作るわけじゃないのに、ちゃっかり者の私は、東条さんにお世話になっている分のお返しをしている気持ちになっていた。

お弁当を完食した後、東条さんが、デザートにとプリンをくれた。ガラスの容器に入ったそれと心をとぎめかせていると、東条さんが、来週は火・木・金で来てくれないかと言ってきた。特に予定はなかったからすぐにOKの返事をする。

口の中でするようなおいしいプリンを堪能たんのしていたら、何故か今朝浮かんだ疑問が頭をよぎった。と同時に、以前、鏡花さんから言われた言葉も思い出した。

『いい？ 麗。さつさと相手を見つけないとダメ。大抵の男は既にお手つきなのよ。いい男はみんな既婚者がゲイなんだからね』

——目の前に座る、社内で一番いい男の東条さんを見やる。

うん、確かにかっこいい。仕立てのいいスーツが大人の色気を醸かし出している。穏やかな微笑も整った容姿も、物腰が柔らかで丁寧なところも。欠点が見つからない、身近にいるいい男の代表ではないか！ おまけに御曹司で社長で美形で若いとくれば、女性が放っておかない。絶対に選び放題のはず。

なのに、ここ二年は、恋人がいる気配はなし——

ふむ、と考えるながら銀のスプーンでプリンを口に運ぶ。そして、ソファに置いていた自分のバッグに手を伸ばした。

三、四日前に来た友人からの手紙を、バッグから出す。丁度いいタイミングでエメールが届いたな、なんて思いながら。そして封筒から取り出した一枚の写真を、東条さんに見せた。

「これは？」

司馬さんが淹れたコーヒーを受け取った東条さんは、そのカップをテーブルの上に置いてから、写真を受け取った。

写っているのは、私の大学時代の友人だ。後ろは教会で、庭のきれいな芝生がとつても爽やか。ひとりは白のタキシード、そしてもうひとりは白の燕尾服を纏って幸せそうな顔で笑っている。写真を眺めた東条さんは、「楽しそうですね」とつぶやいた。

「実は去年の秋に、私の友人が結婚しまして」

「そうなんですか。おめでとうございます」

東条さんが写真を返してくれた。受け取った写真を眺めながら、私は続ける。

「それでこの写真を送ってくれたんです」

ん？ と一瞬間をあけて、東条さんの変わらない微笑の中に微かな疑問符が浮かんだのが見えた。私はそのまま構わず続ける。

「結婚したのはこのふたりなんです。ニューヨークで」

察しのいい東条さんは、「ああ、なるほど」とつぶやいただけで、私の言葉に特に驚きを見せなかった。

写真のふたりは紛れもなく男。つまりふたりは同性婚が認められている州の一つ、ニューヨーク

で式を挙げたのだ。

同性婚の場合、どっちかがウエディングドレスを着るのか？ って思ってたけど、その必要はないらしい。どうやらふたりとも好きな服を選んだようだ。写真のふたりは実に幸せそうに見える。式に参列した友達が、「楽しかった！」と言ってたっけ。

何故突然こんな写真を見せたのか、多分東条さんは疑問に思っているだろう。

私は半分食べたプリンをテーブルに置いて、口を開いた。

「私、自由な考えの人が結構好きなんですよね。そのせいか、ゲイの友達も結構いるんです。そのうちのひとりが去年結婚したんですけど、今は楽しく新生活を満喫しているそうです」

柔和な笑顔のまま、東条さんは私の話に耳を傾けてくれる。その様子に少し安心した私は、意を決して告げてみた。

「私、海外育ちだしアメリカ暮らしも長いんで、両性愛者や同性愛者に全く偏見はありません。人それぞれ性癖は違うものだと理解しています。だから大丈夫です！」

話の方向が見えないのか、黙って聞いている東条さんが困惑した表情をしている。私はその勢いのまま、東条さんに安心してもらえるように笑顔で告げた。

「ですので、たとえ東条さんが同性愛者でも、私は東条さんを変な目で見たりしませんから、どうか安心してくださいね!!」

カチャーン。

コーヒールをかき回していたその手から、シルバーのティースプーンがテーブルに落ちた。普段はブラックコーヒールを好むのに、このときの東条さんは珍しくミルクを入れていたのだ。

東条さんは、笑顔を貼り付けたまま微動だにしない。

いきなり静かになった室内に、銀のスプーンが落ちた残響だけがやけに大きく聞こえた。

石化したように動かない東条さんを見て、それから少し離れた場所にいる司馬さんを窺う。司馬さんは片手で顔を覆っていた。

「あれ？ 東条さん、大丈夫ですか？ やっぱり私、男装の方がよかったですか……？」

フリーズしている東条さんに、戸惑いながらもたずねてみた。身長はそんなに高くないから、男装しても成長期の中高生にしか見えないだろうけど……

数秒後、東条さんはようやく復活したらしい。でも、何故か笑顔が疲れている。そして背後には——暗雲？

あれ、私、余計なこと言ったかも？

なんだか重苦しい空気になった社長室で、司馬さんも私も息を潜めて黙っている。

東条さんは、ようやく口を開いた。

「まずは、何故、私が同性愛者だと思われているのか、ご説明頂けますか？ 麗さん」

穏やかな、でも返事をごまかすことなど絶対に許されなさそうな声が響き渡る。いつも通りの微笑みなのに、威圧感を感じて背筋に汗がたつた。いつもと違うと感ずるのは、たぶん気のせい

じゃないよね？

ど、どうしよう。もしかしくなくても、東条さん怒らせちゃった!?

「あの……実は先日、社内でも東条さんが女性嫌いだという噂を小耳に挟みまして……」

緊張しすぎて声が掠れる。紅茶で喉を潤わせて、と思っただけで、ティーカップをまともに持ち上げられる自信がない。

「——それと、鏡花さん、あ、事務所の先輩がですね、前に言っていたことを思い出しまして……その、いい男は大抵が既婚者かゲイだって。それでももしかしたら？ って……あの、勘違いだったらすみません！」

とりあえず何でもいから早く謝っておけ、と脳が命令を出している。私は勢いよく頭を下げた。数秒後、東条さんがそつと息を吐いた気配が伝わってきた。

「いい男は既婚者かゲイ、ですか……。なるほど、つまり、麗さんは私のことをいい男だと思っていると、そう解釈してよろしいんですね？」

僅かに空気が軽くなる。あれ？

東条さんがいい男なのは確かなことだ。社内の女性なら、いや社内といわず世の中の女性十人中十人がイエスと頷くだろう。私はこくこくと頭を上下に動かした。

「それはもちろんです。東条さんはかっこいいですよ？」

何を当たり前なことを言っているのだろう。

この直後、室内には一足早い春の訪れのような、そよ風が舞いこんだ。部屋の重苦しさが一気に

払拭される。

「ありがとうございます」

東条さんはやけに嬉しそうな笑顔になってそう言った。そして少し冷めたミルク入りのコーヒーを一口飲んで、ゆつくりと私を見つめてきた。

「麗さん。一つ訂正をお願いしたいのですが」

「はい！」

びくり、と肩が動いてしまったことは見逃してほしい。私は唾を呑みこんで、続きを待った。

「私はゲイではありません。恋愛面では、同性に興味はありません。ちゃんとノーマル……いえ、アメリカ流で言えばストレートですから。その誤解は、ちゃんと解いておいてくださいね？」

柔らかな声の中に、有無を言わせない何かがあった。

「は、はい！ 申し訳ありません！ とんだ勘違いを……」

恥ずかしさと申し訳なさから顔が真っ赤に火照るのを感じる。うう、私、穴に埋まってもいいですか……

動揺する私をよそに、東条さんはさらに私を困惑させる言葉を言い放った。

「私は女性にしか興味がありませんので……いえ、むしろ、麗さんにしか興味がないのですが」

うん？ 私にしか興味がないってどういう意味だ？

ちゃんと秘書としても頼りにしている、とか？ もしそうなら、嬉しいような、照れくさいような気がする。

「ありがとうございます……？」

とりあえず、お礼を言うておこう。

若干頬が熱くなっていることに、どうか気づかれませんように。



麗が食後の歯磨きのために社長室を離れた後――

小さく笑い出した白夜に、司馬が恐る恐る声をかけた。

「社長……？」

「ふふふ、都合がいいと思いついておいた噂が、まさかこんなところで裏目に出るとは……」

くすくすと笑う白夜からは、再び不穏な気配が溢れている。

女性嫌いなのでは？ という噂が一部の間で広まっていることはもちろん知っていた。女性が近寄ってくると余計な問題が起きることは避けられない。だから、かえってその噂は都合良かった……が、危うく麗に同性愛者だと誤解されるところだった。今までの苦勞が台無しになるような展開に発展するなど冗談じゃない。

全く、つくづく彼女は手強い。予想外の発言と行動で、いとまたやすくこの自分を振り回してくれる。

だが彼女は気づいているのだろうか？ 狙った獲物が手強いほど、逆に狩猟本能が刺激されると

いうことを。

これからどうやって彼女を捕えようか……と、白夜は想像を巡らせて笑みを深めた。

「そういえば、そろそろあのイベントが来ますね。毎年煩わしいだけでしたが、今年は少し楽しみです」

もうすぐバレンタインだ。義理がたい彼女であれば、きっと何かしら用意してくることだろう。たとえそれが「本命チョコ」ではなかったとしても。

——麗さんから頂けるものなら、めったに甘いものを食べない私でも、ちゃんと完食してみせますよ。

果たして彼女は何を用意してくれるのだろうか？　そしてバレンタインに受け取ったなら、当然お返しは必要になるだろう。先々のことも考えなくては。

実に楽しみだ。

司馬の顔に冷や汗が流れていることには気づかず、すっかり機嫌がよくなった白夜は、麗が去った扉をじっと見つめ続けた。

### 〈お詫びとお礼〉

自宅であつたりごろごろ過ごしていた、休日の午後三時。

「ちよつとお菓子作りでもしようかな」

私がそう告げたら、突如、弟の響の表情が曇った。

「麗ちゃん、突然どうしたの？　もしかして、バレンタイン用？」

なんだか思いつきり「違うよね？」と期待をこめて確認しているように聞こえた。何で？

「バレンタイン用ってか、どっちかってゆる〜とお詫びのクッキー？」

実は、東条さんに対しての先日のあの誤解は確かに失礼だったと改めて思つて。だから何かお詫びをしなきゃつて考えたんだよね。

だけど結局、私のお菓子作りの野望は、響に全力で止められた。ねえ、お姉ちゃんちよつと悲しくなつてきたんだけど！

とはいえ、そこまで必死に説得されてしまうと、作るのが不安になつてきたのも事実。それに一流パティシエが作るお菓子を食べなれている東条さんに、私の手作りをあげるのは、かなり勇気がいるかも……。結局、市販のものでもいいか、ということになった。

そう決まったところで思い出した。そういえば、まだ響にお弁当の話をしていない。

「響。明日のお弁当さ、私の分ともう一つ作つてくれない？」

「いいけど……誰かにあげるの？」

東条さんに家庭料理のお弁当を作つてあげる約束をしたことを話したら、響は少し考えてからためらいがちにたずねてきた。

「でも麗ちゃん。その東条さん？　は、きつと麗ちゃんの手作りつて思つてるんじゃないの？　僕

が作ったのをあげるのは、ちょっとかわいそうな気が……」

「え？ でも響が作った方がおいしいし、おいしいものを食べた方が嬉しいに決まってるじゃない」

「うーん、確かにそうだけど……」

響の方がおいしいってところは否定しないだね。まあ事実だからいいけどさ。

「なら少し手伝うよ！ それなら一応は共同作業になるんじゃない？」

名案じゃないか！

けれど響は、笑顔で悲しい提案をしてくれた。

「そうだね。じゃ、麗ちゃんには盛り付けをお願いしようかな」

「……盛り付け……」

私、そこまで信用しないのか……

盛り付け担当でも作ったことになるのかな？ 何となく釈然としないけど……ま、いっか。

休みが明けて出社した火曜日。

お昼の時間になったところで、約束通り東条さんにお弁当を手渡した。

女性なら誰でもクラリとなってしまふ笑顔でお礼を言われて、思わず眩しくて目を瞑ってしまった。

なんて危険なの！ そんなキラキラ笑顔を外でやったら、間違いなくぼたんぼたん人が倒れ

るだろう。救急車が出動しちゃうよ！

「本当にお弁当を作っていただけとは思っていませんでした。ありがとうございます」

「いえ、私は総監督ですので！ 家庭の味ですが、おいしいですよ。うちの弟は料理上手なんです」

東条さんの動きが一瞬止まった。

あれ？ 私また何か変なこと言った？

「弟さん、が、作られたのですか……？」

浮かぶ微笑はそのままなのに、どこかがっかり感が漂う。

あ、やっぱり響が言っていた通り、私の手作りがよかつたのかな？ でも私の料理って微妙だからなあ。変なものを東条さんに食べさせるわけにはいかないし。

「すみません、私は盛り付け担当で、中身は響の手作りなんです……」

ばかり、とお弁当の蓋を開けた東条さんは、そこそこ彩りのいいお弁当を見て再びほんわりと微笑んだ。

「ああ、きれいな盛り付けですね。麗さんの弟さんの手作りですか。確かにおいしそうですが、今度は是非、麗さんのお手製もご馳走になりたいですね」

「はい！ って、言いたいんですけど……すみません、私、何故かひとりじゃキッチンに立たせてもらえなくてですね。私の料理を持つてくるのはちょっと無理が……」

そこまで言っただけで、持つてこれないなら、いつそのこと、誘っちゃえばいいんじゃない？

「あの！ 普段の料理は響に任せちゃうことが多いんですけど、私、お鍋なら得意なんです。もしよかったら、今度食べに来てください。鍋パーティーとかどうでしょう？」

我ながらいい案だ！

お鍋なら失敗しない自信があるし、いろんな具がたくさん食べられて野菜もとれる。しかもヘルシー！ 冬なら温まるしね！

そうお誘いをしてみたら、東条さんが「麗さんのご自宅で、ですか？」とたずねてきた。

「はい。もしご迷惑じゃなければ、ですけど」

その瞬間。

先ほどよりも数倍威力の増したキラキラが飛んできた。眩しすぎて、直視できません！

「迷惑だなんてとんでもない。いいですね、鍋パーティー。是非参加させてください」

満面の笑みで見つめられて、思わず顔が赤くなる。美形への耐性はかなりついたと思っていたけど、こんな不意打ちの王子様スマイルには、まだ免疫が足りない。目の保養を通り越して、目の毒だよ！

失礼にならないように意識しながらさりげなく視線をそらして、後ろにいた司馬さんにも声をかける。

「よかったら司馬さんも是非！ 鍋は大勢の方が楽しいですし。あ、そうだ。海斗さんにも聞いて見ようかな」

携帯を取り出してメールを打つと、何故か東条さんがじっとその様子を見つめていた。

「麗さん、海斗の連絡先をご存知なんですね」

いつの間にかキラキラ笑顔が止んでる。東条さん、ちょっとテンション下がった？

「はい、メールアドレスと電話番号は。この間交換したので」

「そうでしたか。そういえば、私はメールアドレスは知っていますが、まだ電話番号を伺ってませんでしたね。教えて頂けますか？」

あれ？ そうだったっけ？

「もちろんです！」と答えて、すぐに東条さんの電話番号の登録を完了させる。

「ありがとうございます」

柔らかい笑顔に戻った東条さんを見て安心した私は、丹誠の込もった響の手作り弁当を食べ始めた。

食事が終わった後、私は東条さんに用意しておいたクッキーを手渡した。

「この間のお詫びと言いますか……よろしかったら召し上がってください」

「お詫び、ですか？」

「はい。変な勘違いをして東条さんを不快にさせてしまったお詫びです！ その節はすみませんでした！」

ヤバイ。お詫び以外の意味はないんだけど、なんだか恥ずかしくなってきた。

考えてみれば私、家族以外の男性に個人的にプレゼントあげるなんて初めてじゃない!?

受け取った東条さんは、意外だったのか、少し驚いた顔をして「開けてもよろしいですか？」とたずねてきた。私は何故か異常に恥ずかしくなっていて、声もうまく出せずに、無言で頷いた。

東条さんはラッピングを解いて、クッキーを取り出し、上品に食べる。さくつという音が響いた。「とつてもおいしいです。お詫びだなんて、かえって気を遣わせてしまって申し訳ありません。ありがとうございます」

そんな嬉しそうに見つめないで欲しい。優しい眼差しと艶めいた声音で落ち着かない。

今まで体験したことのない緊張を感じて、どうやって東条さんに再び向き合ったらいいのかわからなくなってしまった。

喜んでもらえて嬉しいのに、めっちゃくちゃ恥ずかしい！

バレンタインには早いけど、一足先にバレンタイン気分を味わえた日になった。

## 第二章 恋の一大イベント、発動

### 〈毒見〉

時は少し遡って、二月上旬、京都。

広大な敷地を所有する古紫家の先代当主である雪花は、自室から自慢の日本庭園を眺めていた。あたり一面の見事な雪景色の中で、確かな存在感を放って咲き乱れる一本の老木の桜。四季を問わず一年中咲き続ける狂い桜を、雪花は目を細めて見つめる。時折桜の花びらと共に風花が舞う。白と薄紅の乱舞が、静寂の空間の中で幻想的に映った。

こんな風に、ただじつと静かに外を眺める時間が、雪花のお気に入りだった。思考を中断し、何も考えずにいる時間――

当主の座を譲った今になっても、雪花にのしかかる重責は以前とさほど変わらない。雪花が持つ、一族の運命を左右するほどの絶大な力。その力ゆえに、雪花は息たえるときまで、その重圧から完全に解放されることはないだろう。

しばし落ち着いた時間を味わっていたが、雪花はふと襖に視線を投げる。



数秒後、襖ふすまの前に人の立つ気配がした。そしてその場に正座したらしい、衣ずれの音がする。その人物から、中にいる雪花ゆきはなに恭まことしく声がかかった。

「入れ」

襖が音もなく開き、ふたりの男が姿を現す。ひとりには、実の息子であり当主を継いだ男。鷹臣の父である古紫こむら十夜だ。もうひとりには、この屋敷で現当主の補佐役を務める男。

六十近いはずの十夜は、髪も豊かで白髪もなく、肌も衰えていない。外見だけなら四十代でも通るかもしれない。とはいえ、雪花が八十を過ぎても五十代くらいに見えることに比べれば、その若さは一族の中では目立ったものではない。が、初めて目にする者は、みんな驚愕し、そして納得するのだ。これがかつて政財界や国を陰から支え、ときには操あやつってきた、古いにしへより続く謎の力を持つ一族か、と。

現実をいえば、戦前まで誇っていた絶大な権力や影響力は、今はほとんど失われている。それゆえ表舞台に出ることも滅多になくなってきているのだが、未だに古紫の名は、あらゆる分野のトップに知れ渡っていた。

だがそれは、噂や伝承のように、曖昧あいまいなものが多いのも事実――

当主の補佐役が、雪花にいくつかの書類を手渡した。日本各地から送られてくる報道されない情報や気にかかる出来事は、このような形で雪花の手に届くようになっていく。それは土地にまつわる話だったり人物についてだったり様々だが、大抵が「力」に関する情報だ。異変を察知した一族の者が、他愛もない世間話のような形をとって、雪花に情報を送る。

その報告書を読んでいた雪花だが、ある箇所を目を止めた。

「何か、気になることでも？」

微かな変化を感じた十夜が、雪花にたずねる。

そのとき雪花の脳裏に、とある話がふつと通り過ぎた。

以前受け取った縁談の話。

当時はざつと目を通しただけだったが……なるほど、と頷く。

「そういえば、隼人はやとに見合い話が来ていたが……本人には伝えたか？」

突然息子の話を振られた十夜は、思わず眉を上げた。

「いえ、まだですが……それが何か？」

困惑気味の十夜をよそに、雪花は続ける。

「どうやら面白い娘がいるようじゃ……なかなか興味深いぞ。この話も偶然ではなからう。十夜、先方には見合いを承諾したと告げておけ……あちらからの話では、隼人も無下むげにはできぬじやろう」

「それは、隼人の縁談を進めろということでしょうか？」

少し硬い声が響いた。だが雪花は首を横に振る。

「なに。それは本人に任せる話じゃ。気に入れば結構、そうでなければ断ればよい。わらわの役目は、ただふたりを巡り合わせる事だけ。……年寄りには娯楽が少なくてのお」

ころころと笑う雪花に、十夜は軽くため息をついた。

「孫で遊ぶのはやめて頂けませんか。先方が望めば、こちらから断ることが難しくなるというのに」

「別に遊んではおらぬぞ。隼人も可愛い孫のひとりじゃ。わらわはただ、縁を作るきっかけを与えたいにすぎぬ。人の縁とは、神の意思か、はたまた他者の思惑か。それは偶然に、そして必然に結ばれるもの。一度結ばれた縁は、そう容易くは切れぬ」

淹れ立ての熱いお茶を一口啜る。そして目を細め、唇が弧を描く。

「それこそ、縁切りの神にでも頼まぬ限り、な……」

意味深に告げられた言葉に、十夜は眉を顰めた。

だがただ一言、「了解しました」と告げて、十夜は雪花の部屋を後にした。



「あの、長月さん！」

社内を移動中、後ろから数人の女性社員に声をかけられた。その声に宿る緊張感に、嫌な予感がよぎる。振り返ると同時に、手に紙袋を数個押し付けられた。

「お願いします！ 私たちの代わりに、社長に渡していただけませんか……！」

顔を真っ赤にしているまだ若い女性社員三人は、何だか恋する乙女のように微笑ましい……って、そうじゃなかった。司馬さんから、東条さん宛てのバレンタインの贈り物は受け取らないようにっ

て言われてたんだ。しまった、こんな日にひとりで行動するなんて迂闊だった。

「社長はバレンタインの贈り物は受け取らない主義ですが」

顔は無表情のまま、淡々と告げる。新入社員ならまだしも、多分入社してから二三年は経っていないような彼女たちなら理解しているはずだ。だけど、「それでもお願いします」と頭を下げられてしまった。

うん、できることなら渡してあげたいけど……司馬さんからも言われているしねえ？ でも目の前でこんな必死になられちゃうと、私としても心苦しい。東条さんはやっぱりよくおモチになるようだ。

知っていたことだけど、何となく面白くないと感じるのは何故だろう。

「わかりました。受け取るかどうかは社長次第ですので、確約はできませんが。それでもよろしいですね？」

「はい、かまいません！」

彼女たちは私に頭を下げて、嬉しそうに立ち去っていった。

一応私が受け取ったことに、少しの可能性を見出したのだろうか？

「いや、それって、ちょっと困るんだけど……」

誰もいない廊下でそんなことを呟いてから、重い足取りで社長室へ戻った。

司馬さんに会うと、察しのいい彼は私の状況をすぐに理解してくれた。幸いというか、東条さん

は今、この部屋にはいない。それでも私は小声でこしょこしょと、司馬さんに話しかける。

「どうしましょう、司馬さん。社長にお渡しする確約はできないと申し上げたのですが、それでも構わないと押し切られてしまいました」

「可愛くラッピングされたチョコレートらしきものが三箱。それぞれの紙袋から覗いている。めちゃくちゃ女の子〜！ って感じで、ラッピングを見ただけで気持ちの込めようが伝わってくる。それを私がこのまま捨ててしまうことは、さすがにできない。」

軽くため息をついた司馬さんは、「仕方ありませんね」と呟いた。

え？ 渡すの？ いいの？ と困惑気味に見上げると、私の手から紙袋を取って近くのデスクの上に置いた。そして中身を取り出す。

「市販のものなら受け取られるかどうか、社長にたずねてみましょう。ですが、手作りを渡すわけにはいきません」

「え？ 手作りはダメなんですか？」

戸惑いながら聞くと、司馬さんはあっさり頷いた。

「何が混入されているかわかりませんので」

「……」

それで言うと、私のお弁当もやばかったんじゃないか……

うくん、と考え始めた私を見て、司馬さんは少し慌てた様子で「見知らぬ人物から、という意味です」と付け加えた。

ああ、そっか！ 確かに誰が作ったのかわからないものを渡すわけにはいかないよね。万が一毒入りだったりしたら大変だし。東条さんが毒見係が必要なほど偉い人だつてこと、忘れてたよ。

「でもこれ、三つとも手作りっぽいですけど……」

うん。どう見てもこのラッピングは、市販のじゃないよね。めちゃくちゃ気持ちが入っている、手作り本命チョコだよ。

しばらく悩んだ末、司馬さんが「心苦しいですが、やはり捨てましょう」とその手作り品たちから目を上げた。思わず、ガシ！ と手首を掴んでしまった。

「せめて！ 中の確認ぐらい！ それに名前はわかっているんですから、変なものを入れたりはしないでしょう！」

そんな自殺行為、普通しないだろう。

私の言い分に納得してくれたのか、司馬さんがラッピングを解いてくれた。

ワオ！ すっごい！ 気合入りまくってる！

手作りトリュフに、ハート型のチョコレートケーキ、そして三つ目はザッハトルテ？ とても手作りレベルに見えないんですけど？ これが恋する女子の気合か！ すごいな。

思わず感心していると、司馬さんが毒見のためか、トリュフを一つ口に含んだ。

「味は問題なさそうですね」

あなたは時代劇に出てくる毒見係のようですね……

「そうですか？ では私も遠慮なく一つ……」

司馬さんが毒見係なら、そのサポート係の私も、と、ココアをまぶされているトリュフをつまんで食べた。

ちよつと甘い。でもおいしいぞ、これ！ 売り物レベルだよ！

その調子で、ケーキとザッハトルテも味見する。うん、もう少し甘さが控えめなのが私の好みだけど、これもいける！ 絶対に私には作れない代物だ。尊敬するよ。

結局、いくらおいしくてもやはり手作りのものはダメということで、一緒に入っていたカードだけを渡すことにした。彼女たちには申し訳ないけど、それで許してください！

司馬さんにカードを渡してもらえようお願いしますと、こちらはすぐに頷いてくれた。やっぱり食べ物をあげるのは難しいんだな。この前は市販のクッキーと、響のお弁当だったから、受け取ってもらえたんだ。私を介しているから「見知らぬ人物」ではない、ということ。私と違って響の料理はおいしいから、食べてもらえてよかった、なんてことを思った。

司馬さんが用事で会社を離れ、入れ替わるように、東条さんが社長室に戻ってきた。今の時刻は午前十一時。司馬さん不在の間、私は東条さんのスケジュール管理を任されている。

東条さんは執務机でパソコンに向かってる。

「十一時十五分から、お客様がお見えになります」

朝の時点で一日のスケジュールを一通り伝え、直前にまた伝えるのが決まりだ。手を止めた東条さんが、ゆつくりと私に視線を向けた。

「あと十五分ですか……わかりました。いらしたら、こちらに通すよう伝えておいてください」

「はい、かしこまりました」

お辞儀をして、受付の人に電話をする。アポが入っている時間と人の名前を告げて、内線を切った。

これから来るお客様のために、私はお茶の準備にとりかかった。

ご来社予定なのは、警視庁の桜田さんって方だ。ここはセキュリティ会社だけに、何かと警察に協力することもあるのだろう。詳しくは知らないけれど。

きつちり十五分後に、社長室の扉がノックされる。

東条さんの「どうぞ」の声に、案内してきた秘書課のひとりが頭を下げた。続いて後ろから入ってきた人物を見て、私は内心思いつきり動揺した。

必死に顔の表情を固定したまま、その人物を見つめる。

二十代後半の、甘いマスクが魅力的な背の高いイケメン。

しかし！ その顔には見覚えがありまくる。

私の心拍数は一気に上がった。

「警視庁の古紫隼人です。本日は桜田に急用が入りまして、私が急遽代わりを務めさせて頂きます」

突然のことで申し訳ないと少し困った顔で微笑んだ彼は、最後に会ったときと全く変わらない。周りの女性が思わず見惚れるような、人を惹きつける甘い容姿の彼は――